

選考委員会総評

委員長 大石 芳野（おおいし よしの）

毎回思うのは、多くの写真集や、写真展として発表したオリジナルプリントなどを見て、審査をしているのか勉強をしているのか…。どれもしっかりと撮影していて、深く考えさせられました。同時に、選ぶというのはとても難しく迷い緊張もします。そうしたなかで今回、初沢亜利さんの写真集『東京 二〇二〇、二〇二一。』が林忠彦賞に選出されました。

応募された沢山のスナップ写真の流れの一つにあり、その代表的な感じがします。コロナ禍、多くの写真家が街を歩いてスナップを撮っていました。東京も感染パンデミックになり、私も地方に取材に行こうとすると「東京の人は来ないでほしい」と言われたほど、蔓延していました。そういう状況の中、初沢さんは精力的に撮影しました。他の人の作品からも、都会ばかりか田舎の光景も、コロナ禍で自分はどうなのかと考えながらファインダーを覗いていたことが伝わってきました。

その中で『東京 二〇二〇、二〇二一。』は、東京中をくまなく歩いてシャッターを切っています。よくこれほど歩いたものだと驚きさえ覚えるものです。2年間の社会状況をしっかりと記録しておくという意味も伝わってきます。例えば高尾山の写真にはオリンピックのマークが写っていて、高尾山も東京都だと思いながら東京オリンピックを改めて伝えるという工夫もあり、あれもこれも幅広く撮影して一冊にまとめています。林忠彦賞の審査が行われなかったこの2年間の東京を示した凄さが林忠彦賞に相応しいと評価されました。